階級戦線拡大のため
"CO守る会"を積極的にひろげよう！

今年の闘いの方向
宮川組合長に聞く

新しい年をむかえ、闘いを反省しさらに闘いの前進をはかるため組合長に昨年の反省と、今後の闘いの方向をききました。

組合長の提起をみんなでさらに討論をふかめ、今年の闘いの決意をふかめましょう。―編集部―

苦悩の中から

―この一年の経過―

――この一年間の闘いの経過を簡単に総括すると？

組合長　昨年の特徴は一月のCO患者、遺族協定を契機に三池労組内部でCO闘争をはじめ、今後のすべての闘いの方向をめぐって大衆討議がおこされたことです。元旦から本社前の座りこみをおこない、遺族CO患者家族会の行動を中心に最大限の抵抗をくみました。

炭労、三池労組という闘いの連携の中から一応の会社協定をむすぶことができました。

二月にはこれを契機に従来のCO闘争資金の整備と、闘いの戦線を再確立するために一応の戦線整備をすることを決定しました。

この問題をめぐって長期にわたる大衆討議がもたれ、最終的には機構改革、完全単一化で体制を整備することができました。

新執行部の発足とともに、第四次合理化反対、CO患者を守り遺族補償を継続させる闘いに出発しました。

このために第四次合理化阻止闘争、生命を守る職場闘争、階級連帯をひろげる「CO守る会」の拡大を柱に闘いを組織してきました。

第四次合理化反対闘争は反合理化闘争の強化という視点から、産業別指導とともに、地域連帯を強化し地評、県評オルグの交流を中心におき、多くのオルグのみなさんと長い闘いを闘ってきました。

新たなる発展

昨年十二月二十七日、九十二日間にわたって三川鉱うら門付近の阻止行動、座り込み、ハンストは解除されました。この闘いの成果は、私たちの長期にわたって力強い抵抗闘争の持続が、数々の成果をうみ、組織的な発展をみたことを確認し、次の闘いへと発展する基礎作りとなりました。

新年早々に皆で総括をして、今年に引きつがれた七級の闘い、遺族の闘い、第四次石炭政策反対の闘い、大幅賃上げへと、春闘の中で全力を集中して闘わなければなりません。

重要な「守る会」

昨年発足した「CO患者守る会」は全国各地から続々と加入申し込みがつづいています。

CO患者を守る会は今年一月二十二日の三井鉱山と炭労、三池労組の協定以後、大要つぎのような闘いの総括にもとづきだされたものです。

一、過去四年間のCO闘争のなによりの成果は、「生命を守る闘い」としてのCO闘争の発展である。それは遺族会、CO家族会の結成であり、まず自らが事実をつきつけて立ち上がる力が全国の労働者の共感をよぶということである。その共感は、全国の仂く者の「生きるための闘い」として結集されるし、CO闘争はそれらの闘いを結集する指標になる。

二、三池労組内部にとっても闘争資金の整備とともに、われわれ自身が真にCO闘争をひろげていくために一層の質的発展をはかる必要がある。

このような決意で出発した守る会は年末ですでに二千名（三池労組以外）近くに達し、一億四千万円のカンパもほぼ予定通り集まる見通しがたちました。

今年こそは守る会に結集した貴重な全国の活動家とともに、私たちも転場、地域に闘いを発展させましょう。

元気な宮川組合長
（国有化闘争坑底座りこみ）

主婦会活動十五年の歴史に学びつつ

三池主婦会長　久保時江

三池主婦会の皆さま明けましてとうございます。一九六八年が、あっと言う間にすぎてしまいました。差別に耐えて来られた組合員の皆さま、ほんとうにつらかったでしょう。また内転外転にはげみながら家計を維持して来られた主婦会の皆さまもどんなに苦労の連続だったかと思います。三川鉱大爆発も昨日のように思えてなりませんが、あの悲しみから早や六年を迎えました。人として生きることの希望さえないままに傷ついているに違いありません。

遺族、CO患者家族、主婦会員は師走の風の中ハンストでがんばった。

遺族の方やCO患者と家族の皆さん方はどんなにか淋しく、つらいことだろうと思いますと、政府や三井資本に対する怒りの目を向けざるを得ません。

私たちは一時的な便法として、仂かなければできない現実の姿から、いまは婦人労仂者として自分たちを位置づけしなくてはならない所まで来ております。

かたや、主人たちの転場の実態はどうでしょう。精いっぱい差別を押しつけられ、保安はおろそかにされ、仂く人たちの健康があまりにも軽視されています。災害は激増し、今日も何処かで労仂者が傷ついているに違いありません。

三十三年、会社から第一次合理化が提案されて以来今次の第四次合理化計画まで、幾多の炭鉱労仂者が犠牲を受けると同時に、地域住民にあたえられた損害や悲しみはかり知れないものがあります。

産炭地の危機は、三十五年ごろから筑豊を中心として大きな社会問題となって来ております。

爆発以来私たちは、再び未亡人を出してはいけない、中毒患者を出してはできないと願い、生命と健康を守る権利闘争を組合とともに進めて参りました。年明け早々実施される会社の四次合理化がどんなに、表面上立派な言葉であっても、坑口合併を強行した暁に来るものが何であるかを、みんなで理解しなければできません。災害は忘れたころに来ると言われます。六八年は、遺族とCO患者の要求をかかげ、第四次合理化阻止の闘いと国有化闘争を結合し、闘ってまいりましたが、六九年もまた決してなまやさしい年ではありません。苦しさをのりこえ、主婦会活動十五年の歴史に学び、遺族とCO患者を守る闘いを教訓にし、ふまれてもけられてもくじけることなく、今年もまたしっかり頑張りたいと思います。

最後に全国の仲間の皆さまのご支援に心から感謝を致しましょう。

資本主義維持をうたう
内乱鎮圧に米軍出動も可能
解説・安保条約　第1回その前文

「南ベトナムで米軍がとっている措置は集団自衛権の行使ということになろう」（六七年三月、当時の椎名外相の答弁）。日本政府によれば、はるか太平洋をへだてた小国の民族解放闘争を弾圧するために、「自衛行為」になる。そして安保によってアメリカと手を結ぶ日本は、「ベトナム戦争で中立でない」（椎名外相）どころか、「安保の目的達成」のために軍事基地を提供し、都会のど真中に野戦病院をつくったりするのは「当然の行動」（政府発言）だということになる。

▼…チエコ事件が起こると、自民党の福田幹事長はえたりとばかり「社会主義国は侵略しないという無防備中立論の前提はくつがえった。安保条約の必要性を国民は認識した」と安保礼讃論をぶった。政府・自民党の高姿勢は、この数年ベトナム戦争や基地周辺の被害などをめぐって安保の〝危険性〟がますます明らかになり、追いつめられていたかれらの巻き返しといえよう。

だが、チエコ事件の教訓は決してかれらのいうようなものではない。チエコ事件は社会主義国家内の矛盾、〝自由世界への侵略〟ではなかった。むしろワルシャワ条約という軍事同盟による〝相互防衛〟の約束が、ソ連軍出動の口実になったことを見逃がすわけにはいかない。

▼…安保条約でも、前文と第三条で〝資本主義体制の維持〟がうたわれている。このことは、日本で資本主義体制の変革を望む勢力が強まった場合、米軍が〝条約の約束〟にもとづいて弾圧にのりだすことを可能にしている。

米軍出動の場合は、ソ連軍のようにわざわざ国境を越えてやってくる面倒はない。日本国内に常駐している米軍が出動するだけでコトは足りる。在日米軍の目的の一つは、日本の資本主義政権や独占資本が、労仂者階級の力で倒されるのを阻止することにあり、沖縄の米軍ミサイルは、本土にも向けられるのである。

▼…「ドロ棒がはいる心配があるのに、戸締りをしないバカはいない」と政府・自民党は〝安保戸締り論〟を主張している。ドロ棒と国家間の戦争を同じに論ずるのは国民をバカにした話だし、安保条約が〝共産主義封じこめ〟でなく、日本国民の〝封じこめ〟に役立つ危険性を知る必要がある。